化学発光免疫法によるＨＢｓＡｇ　ＨＣＶＡｂにおける血清と血漿の測定値の比較検討

◎渡邊 晃子[1)]、宮村 奈美子[1)]、今野 貴徳[1)]、浪岡 貴人[1)]、相田 惠美子[1)]、藤野 博子[1)]
一般財団法人 大原記念財団 大原綜合病院[1)]

【目的】当院ではウイルス性肝炎の検査として化学発光免疫法による HBs 抗原（以下 HBsA ｇ）、HCV 抗体（以下 HCVAb)の測定を実施しているが、その 90%が至急検査としてオーダーされているのが現状であるが、血清を検体として用いているため採血から血餅収縮、遠心、血清分離が終わるまで 20 分～30 分を要し、採血から測定値が確定するまで 1 時間程度かかってしまうのが現状である。そこで EDTA-2K の採血管で採血した血漿を検体とする事により測定時間の短縮が可能である事から、今回我々は HBsAg、HCVAb について同一患者からの血清と血漿での測定値の比較検討をおこなった。

【機器及び測定試薬】測定原理：化学発光免疫測定（CLIA）法　機器：ARECHITECT アナライザー i2000SR（アボットジャパン株式会社）試薬：アーキテクト HBsAg（×500）、アーキテクト HCV（×500）

【対象および方法】2018 年 10 月～2019 年 5 月まで集めた同一患者で同一時採血の血清検体と血漿検体で HB ｓ Ag 陽性 26 件、HCVAb 陽性 64 件、HBsAg、HCVAb ともに陰性の血清、血漿検体 20 件を 3 重測定し、相関係数、直線回帰を求めた。

【結果】HBsAg については相関係数 r=0.9903、直線回帰式は y=0.936x+4.51 と血清と血漿の測定値の相関は良好であった。HCVAb については相関係数 r=0.9967、直線回帰式は y=1.006x-0.03 と血清と血漿の測定値の相関は良好であった。

【考察】HBsAg については陽性測定検体数が 26 件と少なく、かつ無希釈で測定できる限界が 250 IU/mL までであり、希釈測定が必要な高値検体における血清と血漿の相関を証明するには至らなかった。HCVAb についても陽性検体が 64 件であり、HBsAg よりは多かったが相関を検討するには十分な測定数とは言えず、今後も HBsAg、HCVAb について陽性検体の追加検討が必要であり、同一患者、同一時採血検体での測定を継続し検証してゆく必要性があると思われた。

連絡先：024-526-0300(内線 1315)